

「巻頭特集」菅井園芸が花き栽培に込める真摯な願い

強く、美しく咲き誇る 名取のカーネーション



名取市は、東北地方で一番の生産量を誇るカーネーションのまちだ。小塚原地区で50年以上、栽培を行っている菅井園芸に、花を育てることへの熱意と想い、名取のカーネーションについて話を聞いた。

手間をかけて育てる 名取のカーネーション

赤いカーネーションの花言葉は、母への愛。言うまでもないが、母の日にカーネーションを贈るのは、母親に感謝の気持ちを表すためだ。

「花をもらって嫌な人はいないです。ありがたうって言葉にするのは照れ臭くても、わざわざ今日は何の日と言わなくても、花二つで気持ちが伝わる。思いを伝えるためのアイテムとして、花を活用してほしいですね」と話すのは、花き農家・菅井園芸の2代目、菅井啓貴さん。

菅井園芸では、父・俊悦さんの代からカーネーションを温室栽培している。名取市のカーネーションは、全国の規格より5センチメートル長い背丈で出荷するため、用途が広くニーズも高い。その分、曲がらないようにネットを張って支えるなど手間がかかる。収穫した花は、仙台市中央卸売市場花き市場に出荷され、県内外のフラワーショップに並ぶ。規格に合わず市場に出荷できないものは、産直市場あじわいの朝・名取店など、県内の直売所で販売している。

「つぼみの状態と花が開いた状態。切り花はどちらを買う方が、日持ちすると思いますか」。取材中、菅井さんから問いかけられた。迷わず、つぼみと答えると、「そう思うでしょ。実は開いている方が日持ちするんですよ」と教えてもらった。

菅井さんによれば、花弁を開かせるためには栄養が必要なのだという。つぼみの状態で切った場合、水だけでは栄養が足りず、花は花弁を開くのに力を使い切ってしまうため寿命が短くなる。一方で、土から十分に栄養をもらって花弁を開かせたものは、花瓶の中で余力を保って咲き続けるのだという。

こうした理由から、直売所で販売する花は、8分咲きまで仕上げてから店頭へ並べる。花持ちが良いと好評で、何度も購入するリピーターも多いそうだ。

菅井さんはさらに長く楽しむ方法として、切り花用の栄養剤を入れると効果的だと話す。「水を吸い上げやすいように茎の先端を斜めに切り、短くなったらコップやお皿に浮かべて楽しめます。ドライフラワーにするのもおすすめです」。カーネーションは花びらが散らないから、長く楽しめるのだと笑みをこぼす。

困難な状況だからこそ 花を届けたい

名取のカーネーションは、花持ちが良いだけではない。強さも併せ持っている。

2011年、東日本大震災による津波で、菅井園芸をはじめ、名取市のカーネーション農家は甚大な被害を受けた。ハウス内にはがれきや海水が押し寄せ、花々を全部なぎ倒した。「農地にはヘドロが7〜8センチメートルも溜まりました。風が吹くと乾いた泥が舞って葉は真っ白に。もうダメだと思いました」。ところが、詳細に確認すると根と茎はしっかりしている。絶望的な状況下において、カーネーションは数カ月後につ



菅井園芸 代表
菅井啓貴さん

父の背中とカーネーションを見て育ち、26歳のときに就農。小学2年生と1年生の娘がおり、姉妹による作業場の壁の落書きアートに心を和ませる。名取のカーネーションの魅力を広めるため、菅井園芸の名でInstagram、Twitterをスタート



人々の心に寄り添える花を届けたい。



1 収穫後、水揚げしながら出荷を待つカーネーション。その姿は端正で美しい 2 品種別にダンボールに詰めて出荷する 3 1本1本、色や形、趣が異なる花々。その出会いは一期一会だ 4 赤、ピンク、黄色、ベージュ、紫など、色とりどり20種以上のカーネーションを栽培 5 一輪のスタンダードタイプは不要な芽を一つひとつ手作業で取り除く 6 約1,000坪の大型ハウス 7 星型のカーネーション。1本の茎から枝分かかれ、複数の花を咲かせるスプレータイプも栽培する